



巻頭言

地球環境研究最前線によせて

(社) 国際環境研究協会 Yohichi GOHSHI
会長 合志陽一

地球環境問題の重要性が認識されるにつれて、問題解決の努力が世界的に広がりつつある。気候変動から越境汚染にいたるまで、問題の深刻さが知られることとなっている。しかし、実態把握、機構解明、対策の立案、いずれも不十分であることもまた明らかになっている。地球環境研究の推進が望まれる由縁である。会報本号では地球環境研究の最前線で活躍している研究者の方々から研究の現状が紹介されているが、会員、関係者にとどまらず広く関心のある方々の参考に供することを念じている。

環境研究は対象が複雑であり多くの困難をとまなう。一般の研究とは異なり、関心のあること、取り組みやすいことから手をつけるという訳にはいかない。キュリオシティドリブンの研究（多くの基礎研究はこの範疇である）とは様相がちがう。更に地球環境研究では、問題点の発見、その解決策を見出すことが重要であることは当然であるが、それだけではない。長期間モニタリングを続けて変化のないことを示すのも重要である。問題のあることだけでなく問題のないことを示すことも同等の重要性をもつといってもよい。しかし、研究費の獲得、研究チームの編成、研究成果の評価、いずれをとってみても両者は同等ではない。ミッションドリブンの研究の難しさといえよう。面白いから取り組む研究となさねばならぬ研究の差とも言えよう。現実の研究は、このようにはっきり区分されるものではないが、性格の差は否定できない。

地球環境研究にかぎることではないが、環境研究につきまとう様々の難しさも最前線の研究者が常に感じていることである。環境研究は現実を直接対象としており、常に厳しい検証にさらされつづける。いくつかの事例から心すべきこととして次の3点をあげたい。

第一：見逃さない。過去に起こった変化、現在みられる異常、新しい技術進歩や施策の変更が引き起こすと予測される変化、いずれにしても見逃

さないことが肝要である。環境問題というよりは薬害問題であったがサリドマイドはそのよい例である。優れた睡眠薬・鎮静剤として開発・市販されたサリドマイドを妊婦が服用すると、新生児に手足の欠損を引き起こす。各国で認可され使用されたため、大きな悲劇となった。米国はその悲劇を免れたが、それはFDAの担当官Dr.ケルシーの注意深い審査のゆえであった。彼女は認可申請の書類をチェックし、ネズミで問題が起こらなかったデータに疑問をもった。ネズミでは薬効である催眠作用がなかった。害はなかったが効果もなかったのである。結局無害であることの証明が不十分として許可しなかった。後で判明したことは、ネズミではサリドマイドの吸収が悪いため、薬効も薬害も出なかったということである。データの意味することを注意深く読みとらなければならない。

第二：放置しない。基礎研究では判明していることでありながらそれが生かされずに悲劇となった例はあまりにも多い。最近のアスベスト公害は典型である。研究者にとり判明した問題を世に訴えても無視されるのは残念である。しかし、アスベスト問題のように現実には残念な事態は稀ではない。研究者は研究成果を社会へ還元するため忍耐強い努力をしなければならない。粘り強さとタフな神経が要求される。

第三：慌てない。サリドマイドは現時点で特定の難病の有効な治療薬として使われている。しかし研究者は研究費の獲得に苦労したという。サリドマイドの研究がタブー視されたためである。Dr.ケルシーの偉大さは彼女がサリドマイド使用を支持したことで再び示めされている。サリドマイドは他に手段がないときは、注意して使えばよいというのである。それにより救われる人がいることを忘れてはならない。

以上、本特集で研究の世界の多彩な状況を垣間見ていただきたいと思います。